

江東区の居住者および居住環境社会環境の変化

飯塚文子

1. 研究の目的

江東区は、隅田川と荒川放水路に囲まれたデルタ地帯で、土地が低く地盤も軟弱である。しかし、江戸開府以来隅田川を隔てながらも江戸市中に近いところから徐々に市街地化し下町的住商混合地域として現在に至っている。本論文は、江東区の発展とともに、居住者および居住環境・社会環境がどのように変化していったか、また変化の原因は何かを考察する。

2. 論文構成

第一章で自然環境と、人間による地域発展それに伴う問題点をとらえることを通じて江東区の概観を調べる。第二章では現在の居住者の住みわけ状況を手がかりとして地域区分を行い居住者と居住環境との関連を考察する。第三章では江東区の居住者・居住環境・社会環境の推移を調べ現在のつながりを考察する。そして第四章において近年、江東区の居住環境、社会環境が急激な変化をみせているが、その変化の主たる要因と考えられる集合住宅の影響を考えてみたい。

3. 論文要旨

江東区は長期の沖積作用と江戸時代からの埋め立て工事によってしだいに土地を形成した。まず農業・漁業が発達し、隅田川を隔てて江戸市中に近いところから朱引内となり、急速に市街地化していった。これには材木商の木場への移転も大きく影響している。明治に入り工業化が始まり、大正になると農村地帯だった城東地区が大きく工業化していった。戦後は住商混合地域として、人口も回復し発展していったが、昭和42年の「公害対策基本法」昭和44年の「東京都公害防止条例」により工場移転が進み集合住宅の急増をみるようになった。

現在の区の住みわけ状況を主成分分析により地域区分をすると、第1地区(深川地区)—1日住民、持ち家、民営借家第2地区(亀戸地区)—ホワイト

カラー、第3地区(大島地区)—公営・公社・公団住宅居住者、第4地区(砂町北地区)—ブルーカラー、第5地区(砂町南地区)—新住民、のように区分できる。これらの区分した地区は実際に観察することにより、さらに内部の特徴をもった地域があることがわかる。特徴的な地域は居住者と居住環境との関連が深いといえる。

それでは、現在の居住者は過去の居住者との程度つながりがあるのだろうか。居住環境・社会環境とともに居住者の変化をみると下町の貧困住民といった性格がだんだん薄れてきたことがわかる。さらに集合住宅の急増に伴う新住民の大量流入が住民の性格のつながりを断ち切っている。

この新住民の流入が地域にどのような影響を与えたかを調べることにする。まず集合住宅居住者と集合住宅周辺居住者を居留意識・地域に対する愛着・近所づきあいといったもので比べてみるとはっきりした違いがでる。この違いが地域に与える影響として近所づきあいの変化がある。定住意識が薄い者の地域に対する愛着が強く古くからの住民とは団地自治会と町内会という別のグループに所属し子供を通じてのつきあい以外はあまりない。しかし対立という問題までには至っていない。また大量住民流入ということで居住環境・社会環境を変化させる力も大きい。すなわち交通の便がよくなり商店が増え買物がしやすくなる。工場がなくなり緑も増え公害がなくなる。学校をはじめ公共施設が整備されてくる。そうすることにより、さらに公害規制・集合住宅建設の指導など行政の力が入りより住宅地域として固まっていく。ところでこのように整備されていく大規模集合住宅地域とは別に古くから発達してきた市街地に近年乱立する民間マンションが地域に与える影響は種々の問題点を含んでいる。今後は周囲の街並みとの調和・商業地域・住宅地域などの地域特性の指導強化が望まれる。